国際交流活動実施報告書

Meet in Textile: TAU x Konstfack

期間： 2026/1/31～2/10
場所： Sweden, Stockholm
参加者：
学生：テキスタイルデザイン領域大学院 2年：イ　ソヨン/リ　セイシュン　1年：沼尾優 /チャン　ヒユン
テキスタイルデザイン専攻　学部 4年：久保田凪/水野ねね
引率：テキスタイルデザイン研究室　川井由夏 教授/チョウ　ブンイチ 助手
KONSTFACK,Textile（University of Arts, Crafts and Design）
Elsa Chartin, Head of BA Textile, Senior Lecturer in textile.
Åsa Pärson, Textile Designer, Lecturer, woven construction
Ulrika Mårtensson Hanje, Textile Designer, Lecture
Ellen MÅRDSJÖ/Fanny JONSSON/ Annie LINDBLAD / Elvira STAAF / Julia SCHANTZ/
Lisa HAGSTRÖM/Julia WALLMAN/

報告者：テキスタイルデザイン専攻教授　川井由夏

概要・背景
〈Meet in Textiles: TAU X Konstfack〉は、多摩美術大学テキスタイルデザイン専攻とKonstfack（スウェーデン王立芸術工芸デザイン大学）Textileの学生と教員による国際交流活動である。ストックホルムデザインウィークにも重なる1月31日から2月10日の期間、学生たちが国際的な場で、多様な人々とテキスタイルを通して出会い刺激を受け、制作への取り組みを再考する機会をつくることを目的とした。両校の学生の作品展の開催を軸に、プレゼンテーション、ディスカッション、ワークショップの実施と両校の学生で学外見学を実施した。
KONSTFACKは、アート、クラフト、デザインを専門とするスウェーデン最大、ヨーロッパでも有数の芸術大学で、”Critical Thinking and an Empathic Approach” を掲げ、探究者のための大学と説明している。1844年創立以来、毎年900人の学生が学士・修士課程に在籍しており、学生の多くは世界からの留学生であり、教師陣も同様にさまざまな背景をもつ国際的な大学である。 古い枠組みにとらわれず分野を超えた教育を推進している。2023年に国際交流・新規協定校開拓を目的として訪問し、この大学の特徴に触れたことが今回の活動の契機となり、その後、教員間での交流を継続し国際交流活動を実施することができた。

詳細日程

1月19日（月）

渡航前に、参加者全員でZOOMミーティング、簡単に大学での専門などについて話し自己紹介する。

1月31日（土）- 2月1日（日）

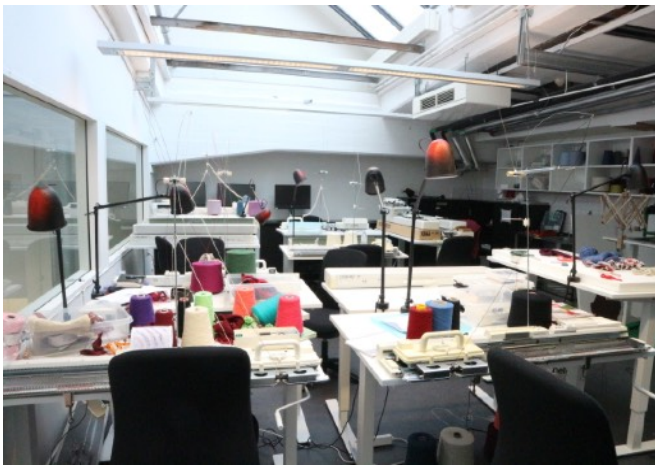
羽田空港に夕刻集合、フィンランドのヘルシンキでトランジット、入国審査を受け早朝のヴァンター空港で次のフライトを待つ。7時にストックホルム、アーランダ空港に到着、荷物も多かったので宿泊するエリアに空港バスで移動する。スウェーデンは、ほぼ100%キャッシュレスのため、交通機関はじめ何をするにも事前にアプリを準備し対応した。宿泊場所は、ソーデルマルム地区の公園側の静かなエリアだったが、作品を含む大荷物を持ち、公園内の雪道の移動に苦労した。

翌日からのKONSTFACKへの移動は地下鉄のため、最寄りの駅を確認しつつ、ソーデルマイム地区の近隣を散策した。小高い丘にそびえ立つ教会を見つけ立ち寄る。Högalids församling(ホーガリッド教会)という教会で、日曜日のため、ミサが行われており美しい讃美歌が響きわたっていた。静かに教会のステンドグラスや装飾などを見学する。学生たちは、共用キッチンを利用できるため、スーパーマーケットにも出かける。ユニークなデザインのパッケージや見慣れぬ食材を観察したり、スウェーデンの日常のひとこまを体験した。

2月2日（月）午前

作品を携えKONSTFACKへ赴き、先生方や学生と対面する。午前中は、リーダーのElsa Chartin先生に案内いただき大学内を見学する。スタジオの設備や授業などを見てまわる。日本とヨーロッパは学事の区切りが違うため、KONSTFACKの学生たちは、通常授業に出席しながら今回のプロジェクトにも参加している。

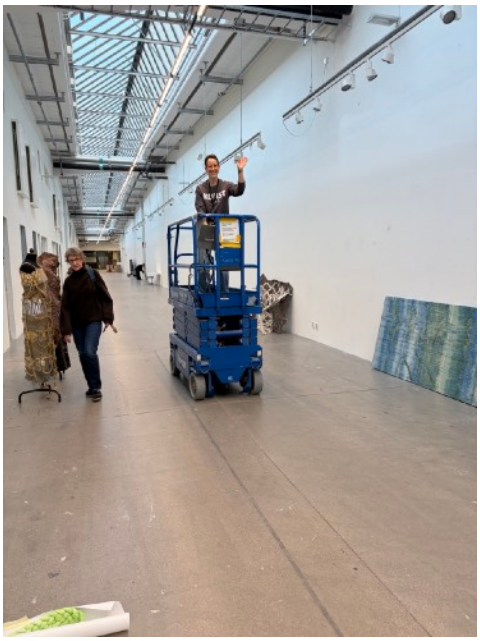
KONSTFACKの校舎の内部は、ぐるりと回廊状の構造で、ギャラリースペースや食堂、図書館前などを通るような造りになっていた。私たちも自由に動けるようにカードキーをもらい、テキスタイルのスタジオで活動した。助手・副手のような立場のアシスタントはいないため、スタジオは、自主的に学生が管理しているとのことだったが、どこも掃除が行き届き整備されており、多摩美の学生たちがその綺麗さに驚き、学生の自主性にも感心していた様子が印象的だった。



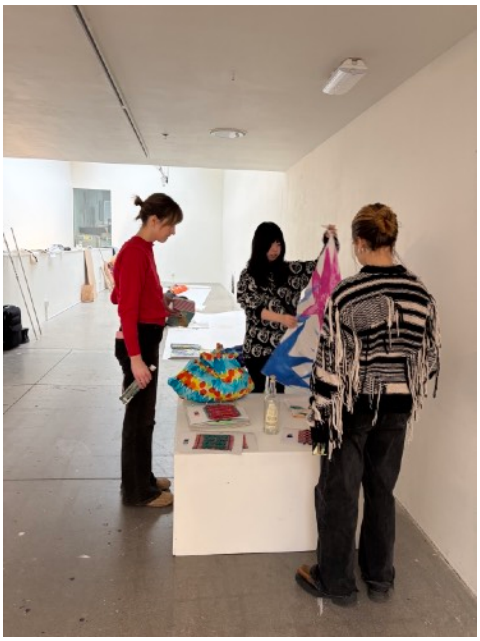
エントランスの広いギャラリースペースから続くキャンパスの中心的エリアに食堂、Café Glasklartがある。学生や教職員が交流する場としても機能しており、一般にも開放されているそうだ。照明や家具も工夫され楽しく温かな印象だった。Elsa先生に本日のメニューを説明していただき、皆でランチを共にした。エスニックやベジタリアンなどの様々なメニューは、国際色豊かで多様な人々が集うKONSTFACKを象徴しているようであった。カフェのレジや食事のサーブには、機能的障害を持つと思われる人とサポートする人が共に協力して働いているように見受けられた。スウェーデンでは、公的機関の食堂運営などを、障害を持つ人々や労働市場で不利な立場にある人々に働く機会を提供する社会的企業が担うケースが多く見られるとのことだった。

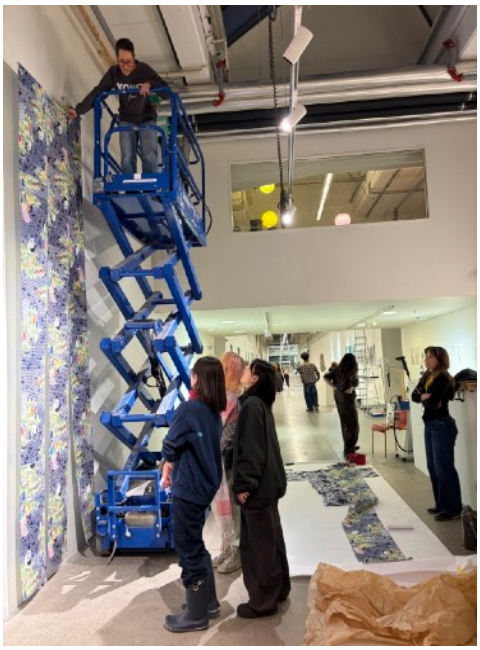
午後から、それぞれの作品を床に広げて、どのように展示していくか話し合った。ストックホルムデザインウィーク期間中で、当初、大学内も展示がいくつか予定されているとのことで場所の問題があったが、Elsa先生の尽力のおかげで回廊の広い展示空間を使用することができた。

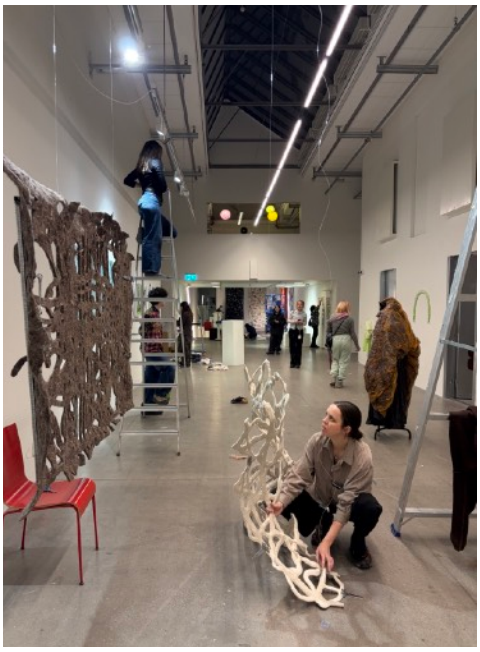
KONSTFACKでは、日本より幅広い年齢層が学び、社会人経験後、入学している人たちも多いようで、日本の大学生に比べ全体に年齢が高い。今回のテキスタイルのメンバーも年長の学生が多く、子育てや仕事を持ちながら学ぶ学生もいた。落ち着いた様子でリードしてくれた。同時に、多摩美の学生の作品や制作に非常に関心を寄せて、作業をしながら質問し合い熱心に話し込む様子が見られた。春から日本に交換留学する学生もいて大いに話が弾み、協力して作業することができた。
途中でElsa Chartin 先生が、かなりのスピードで颯爽と高所作業車で登場し、私たち多摩美メンバーの目を釘付けにした。小回りを利かせて高所作業車を操り、高い場所への作品設置を行なった。KONSTFACKの学生と多摩美の学生の作品を響き合わせて、天井の高い吹き抜け部分には長尺の布を下げ、天井が低く落ち着いた場所には、繊細な小さな作品を展示するなど変化をつけて会場構成できた。
今回、学生たちは海外に作品を持参する体験で、適切な梱包の方法や必要な備品、はじめての場所にどう設置するかの準備など実践の学びが多かった。作品以外の条件が作品の鑑賞に影響することを痛感したという感想もあったが、それぞれ今後の課題があり勉強になった。テキスタイルの特徴のひとつは、小さくまとめて携帯することができ、現場で大きく広げ豊かな空間を作ることができることだ。このおもしろさを再認識することで、それぞれのテキスタイルの可能性を考えるよい機会にもなった。



UpRight MX 19
UpRight







Meet in Textile:

TAU × Konstfack

International Exchange Programme
Art Exhibition

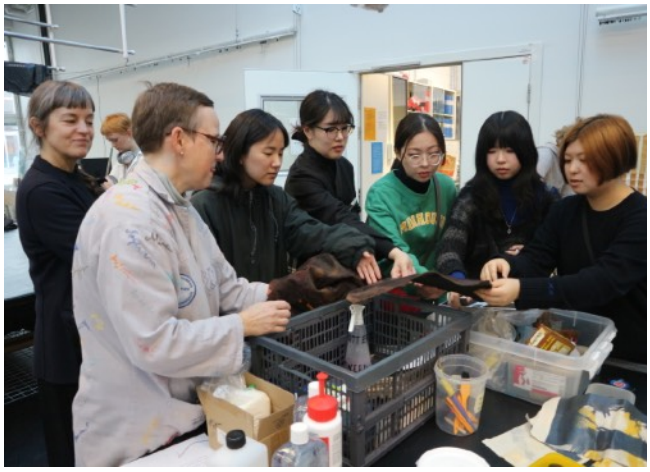
Date : 3rd February - 6th February

Place : Trapphusgalleriet & Seminariegatan 2, Konstfack, LM Ericssons väg 14

Opening : 4rd February 17:00

2月3日（火）

展示の微調整を行い、その後、テキスタイルの授業を見学する。立ち寄った授業では、担当の先生が授業の内容を気さくに説明してくださり、制作中の学生たちも質問に答えてフレンドリーなムードで交流ができた。異色だったのは、舞台や映画の衣装やセットなどに使うテキスタイルの特殊加工の授業である。ホラー映画などで登場する汚れた服や血糊を再現する技術を学び、それぞれ物語を作ってそれに合わせた特殊加工をしてみるという実験的な内容だった。また、大学院生のスタジオを訪問し、制作途中の大型作品について話を聞くこともできた。



その後、”How does your own culture show in your work or in your process?”という問いを軸に全員が作品と制作プロセスについて、プレゼンテーションとディスカッションを実施した。Ulrika Mårtensson Hanje先生が司会進行、Åsa Pärson先生も同席して学生と共に、質問やコメントした。多摩美側は、英語が堪能な学生ばかりでなかったが、それぞれのコンセプトが画像と共にわかりやすく説明されているとのコメントがあった。学生の報告書をみると、文化圏の差異が作家の視点や表現にどのように反映されるのかを実感したという内容が多くあり、KONSTFACKの学生が地元や家業,自然やクラフトに目を向けているのに対して、多摩美の学生は、個人的な関心ごとからスタートしているとの感想もあった。作品制作に真摯に取り組む点はもちろんのこと、発表においても質問が飛び交う積極的な様子に刺激を受けた学生も多かったと思う。

発表の中程でFika(フィーカ)を楽しんだ。Fikaは、“甘いものと一緒にコーヒーを楽しむ”というスウェーデンの文化である。スウェーデン語でコーヒーを意味する”kaffi”が語源とされ、仕事の合間や家庭で、日常的に15分から30分程度の休憩をとる習慣だ。単なる休憩ではなく、メリハリをつけて効率よく働くため、また、仲間と自然なコミュニケーションを生み出す機会にもなっているそうだ。
1月から2月の寒い時期の風物詩, “春を告げるお菓子”と呼ばれる伝統菓子Semla（セラム）をコーヒーと共に楽しんだ。見た目はシュークリームのような形をしているが、ブリオッシュより重いパン生地にカルダモンが練り込まれている。国民的なお菓子Kanelbulle（カネルブッレ）・シナモンロールも登場した。
この日の夜は、ストックホルムの街中で、プロジェクトに関わる教員、学生全員でスウェーデンの伝統料理を楽しみながら大いに語り合った。

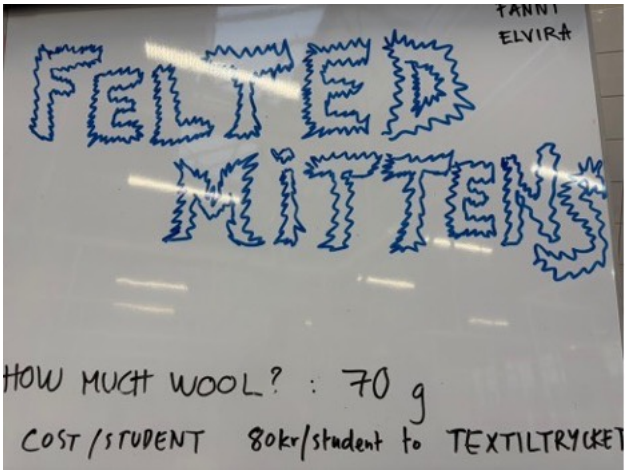
EN TEXTILARES
LOTT ÄR
ATT LIDA!

EN TEXTILARES
LOTT ÄR
ATT LIDA!

2月4日

KONATFACKの二人の学生、FannyとElviraの企画で “Felted Mittens”のワークショップが実施された。二人の指導を受けながら、学生主体で、ウールの原毛の繊維の方向を揃え不純物を取り除くカーディングのプロセスから始め、ビニールの型紙を使って大きなミトンを制作した。フェルトメーキングは、ほとんど道具を使うことなく、すべての工程を感覚を頼りに、それぞれの手で直接素材を触り確かめながら作る。隣り合った学生同士で、お互いの進捗を手で確かめ、声をかけ合いながら協力して進めていた。

学生達は、展覧会の作品設置、プレゼンテーションを経て、ミトンが出来上がる頃には、すっかり仲良くなりコミュニケーションが深まる様子が見てとれた。



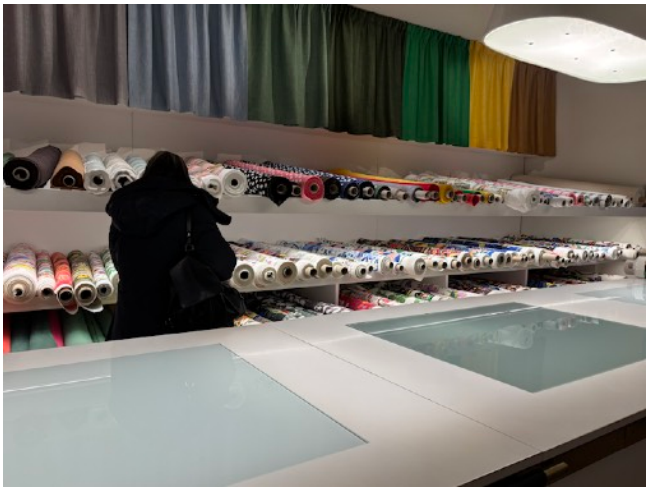
その日の夕方、展覧会“Meet in Textile: TAU x Konstfack”のオープニングが開催された。学生、大学関係者はじめ、訪れた方々から質問やフィードバックを受け、学生同士もあらためて、作品の前で語り合う姿が見られた。また、私が海外研修でフィンランドのアアルト大学に滞在していた時期に、アアルト大学芸術・デザイン・建築学部長として改革を進めていたAnna Valtonen氏と接点があったが、現在は、KONSTFACKの副学長を務めている。忙しい合間を縫って、オープニングに立ち寄ってすべての作品をじっくりと見てくださり、今後の交流について話すことができた。多摩美とオスロ国立芸術大学で実施したプロジェクト“Connecting Wool”を共に実施したKirsti Bræin教授もオスロから駆けつけてくださった。プロジェクトに参加していた学生とKirsti先生は再会を喜び、展示作品や近況について話し込んでいた。
展覧会場には、多摩美を紹介するバナーも展示した。そこに立ち止まって長い間、熱心に読んでいる人がいたので、話しかけてみると、2018年の4月から8月まで環境デザイン学科に交換留学していたEsbjörn Gripさんであることがわかった。ヨーテボリ大学を卒業後に起業、現在は、その傍らKONSTFACKの修士課程に在籍しているとのことだった。昨年は、日本でのプロジェクトにも参加する機会を得て、多摩美で多くを学んだと懐かしそうに話してくれた。Esbjörnさんは、KONSTFACKで突然、多摩美のロゴを見つけて本当に驚いた、と話していたが、私も思いがけない出会いに驚きながらもとても嬉しく、こんなふうに、多摩美の国際交流のネットワークがさらに広がることを願った。

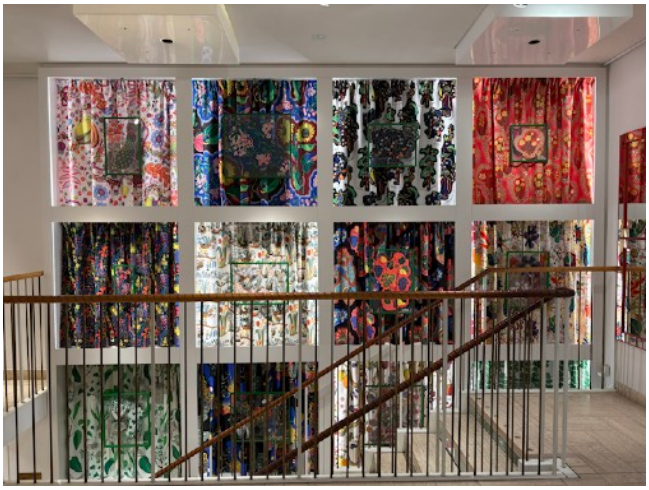
2月5日（木）

午前中、ストックホルムを拠点に国際的に活動する森山茜氏が主宰するStudio Akane Moriyama を訪問する。建築とテキスタイルのバックグラウンドを持つ森山氏は、テキスタイルを建築とどのように関わらせて、人々の体験や空間の豊かさを創出できるか試みている。染め、編み、縫い、プリント、織など、さまざまなテキスタイル技法を組み合わせることで、森山氏は空間を変容させ、その隠れた特質を明らかにするテキスタイルを創り出す。初作品「O邸のカーテン」（京都2009年）以来、建築空間に関わるテキスタイルデザインを行い、2023年は、第18回ヴェネチア建築ビエンナーレ「テキスタイルルーフ」（ヴェネチア2023年）などの様々なプロジェクトを手がけている。

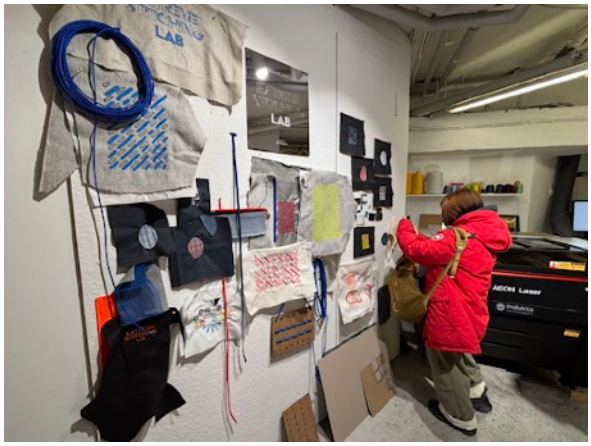
KONSTFACKの卒業生でもある森山氏は、両校の学生達を温かく迎えてくれた。古いビルの中にあるスタジオは、高い天井と壁いっぱいに広がる大きな窓が印象的だった。プロジェクトの模型やドローイング、試作やアーカイブ資料を余すことなく見せていただき貴重な機会となった。具体的にひとつひとつ、学生の質問に応じてくださり、日本語と英語を交えて学生たちに語りかけてくださった。スウェーデンの気候や普段見ている風景が制作に影響していること、光や風、人の手で操作できないものによって布が変化することに関心があり、具体的な試作や実際のプロジェクトから丁寧に説明された。スタジオにある'小さな模型やサンプルが、建築空間に拡大され大きなものになっていく様が想像でき、場所の意味や目的を理解しアイデアをどのように具現化するか、そのためにはスケールをどのように把握するか、素材の耐久性や光と色彩の問題など多岐にわたる現実的な要件をクリアしていくかなどのお話は、学生にとって大変大きな学びとなった。また、子供の頃から大学時代、独立までの様々な体験や海外で暮らし仕事をすることについて、ざっくばらんに質問に応えてくださり、仕事と生活のバランスの中でどのように生きていくか率直にお話しされた。学生たちは、非常に熱心に聞き入り、触発されていく様子を感じた。

午後からは、Svenskt Tenn（スヴェンスク・テン）を訪問する。Svenskt Tennは、スウェーデンを代表す老舗インテリアデザイン会社である。ストックホルムに店舗、インテリアデザインスタジオ、カフェを構える。創業者のEstrid Ericson（エストリッド・エリクソン）と、オーストリア人建築家Josef Frank(ヨーゼフ・フランク)による、鮮やかな色彩と大胆なテキスタイルデザインで、北欧モダンデザインの先駆けとして世界的に知られている。
2018年に、Svenskt Tennによる世界の５つの美大に向けた（RCA, RISD, KONSTFACK, Borås,多摩美）招待コンペがあり、多摩美のテキスタイルデザイン専攻から参加した２名の学生の作品が商品化された。その繋がりもあり、Senior AdvisorのThommy Bindefeld氏は親しみをもって迎えてくださり、事前に展覧会にも足を運んでくれた。当日は、Josef Frankの世界観と実際の生活空間をイメージできるように特別にスタイリングされている店舗２階で、Svenskt Tenの歩みについてスライドレクチャーしてくださった。
Svenskt Tennは、1924年、Estrid Ericsonによってピューター（錫）製品の工房兼ショップとして設立された。Svenskt Tennの意味は「スウェーデンの錫」である。スウェーデンで女性の選挙権が承認されたのが1921年、わずか数年後に３１歳独身の女性がその時代に起業したことは、特筆すべきことと説明された。1934年に建築家Josef Frankが加わったことで、家具やテキスタイルへと分野を拡大する。合理的で厳格な機能主義ではなく、心地のよさや個性を重視している。現在はブール・ヴァレンベリ財団が所有しており、収益は科学研究や教育、文化活動の支援に充てられていることもSvenskt Tennの特徴であるとBindefeld氏は強調して話された。質疑応答の後、学生達は、鮮やかな色に溢れる店内を歩き、大胆なパターンデザインと個性的な配色のテキスタイルやプロダクトを手に取り堪能した。





その後は、ストックホルムデザインウィークに関連したデジタルステッチの展示に立ち寄った。デザインデュオFÄRG & BLANCHEによる“Extreme Stitching Lab”は、素材探求と実験的なステッチングを追求している。高度なミシン、刺繍機、レーザーカッターにより、芸術的な探求と産業的な技術でありながら直接的で実践的なアプローチが可能で、感受性と産業的な精密さを融合する新しいプロセスの開発を試みているそうだ。帰り道、同じ通りのアンティークのボタンやレース、装飾的な繊維製品を扱う手芸店や、ヨーロッパの古着を扱う店などにも立ち寄った。



2月6日（金）

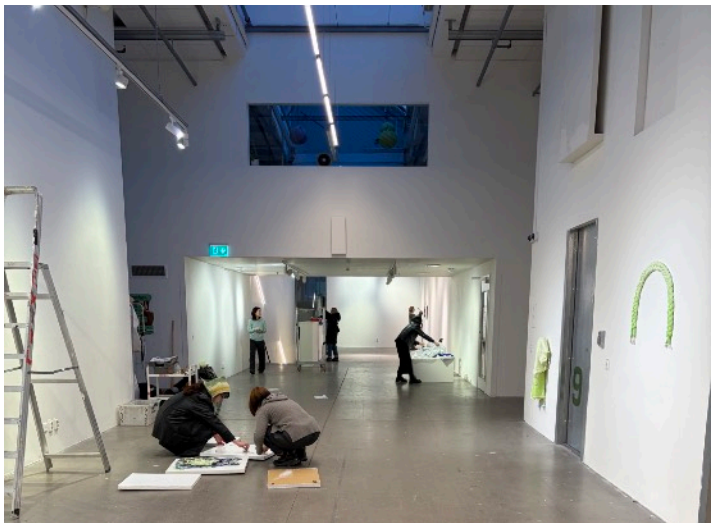
SouthnordにMarcia Harvey Isakssonh氏（マーシャ・ハーヴェイ・イサクソン）を訪ねる。
Southnordは、Isakssonh氏を中心に、アフロ・ノルディック体験が生み出す多様な芸術表現、アプローチ、物語に特化した、アーティストが運営するギャラリーである。ユニークなプラットフォームとしても機能している。Isaksson氏自身も、テキスタイルの素材やテクニックを表現手段として、サイト・スペシフィックな作品、彫刻やパフォーマンスまで、さまざまなメディアを組み合わせて作品を制作している。黒人およびアフリカ系北欧人アーティストのための場を提供し、コミュニティ内のネットワークを構築、交流と対話を促進し、南半球のアーティストや先住民族と連帯し架け橋となることを目指している。Isakssonh氏を囲んで、資料を見せていただき活動について伺い、開催中の“Earthscape” A Southnord Collections Exhibition”のそれぞれの作品解説をしていただいた。

その後、Skeppsholmen（シェップスホルメン島）へ移動した。ストックホルムの中心部の複数の美術館と自然が融合した美しい島である。はじめに、Moderna Museet（ストックホルム近代美術館）に隣接するArkDes（the National Centre for Architecture and Design）で、“Ung Svensk Form”（ヤング・スウェーデン・デザイン2026）を観覧した。スウェーデン各地から集まった次世代のデザイナーが社会、気候、身体、アイデンティティ、生産といった課題にどう向き合っているか、若手デザイナーの活動を紹介する展覧会である。また、MDT Moderna Dansteaterndeを会場に、KONSTFACKとbeckmans college of design, MALMSTEMS の３つの大学による共同開催の家具、インテリア、オブジェの研究プロセス、素材、クラフトに焦点を当てた展示に立ち寄った。スケッチブックや映像資料、試作などの実験的なデザインプロセスの展示は、什器や展示そのものに工夫が凝らされ興味深いものだった。最後にModerna Museet（ストックホルム近代美術館）で企画展の“Late Picasso” とコレクションの作品群を自由に観覧した。

2月7日（土）

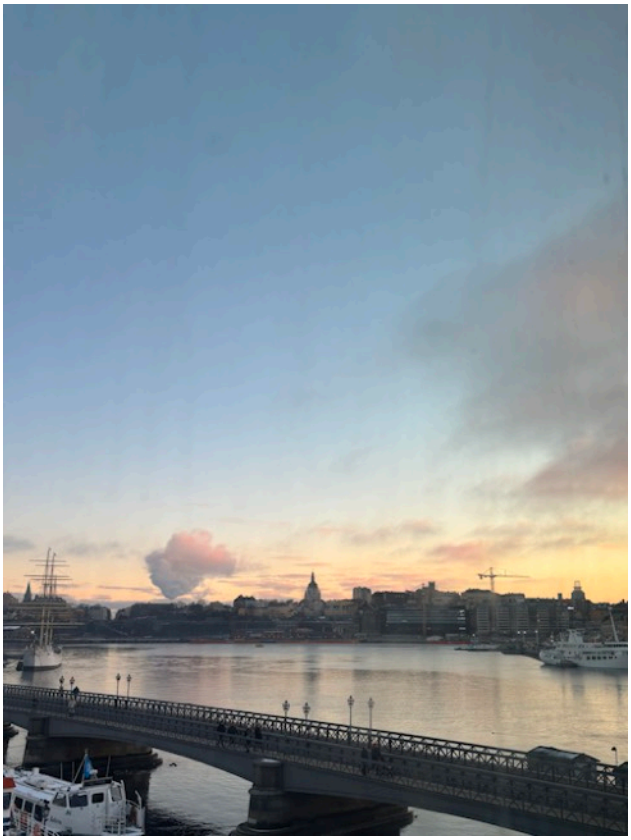
2月3日から7日まで開催されたStockholm Creative Editionの関連展示を見るため、Hudiksvallsgatan（フーディクスヴァルスガタン）に出かける。Hudiksvallsgatanは、ストックホルムにあるアートギャラリーが集中するエリアだそうた。このイベントに関連して３つの展示を見学した。

夕刻には、KONSTFACKで展覧会の撤収を行い作品を引き上げた。約束の時間に到着すると、Elsa Chartin先生がすでに高所に展示したものは下げていてくださり、KONSTFACKの学生たちも手伝ってくれてあっという間に片付いた。再び何もない空間になると寂しく名残惜しい感じがあったが、連絡先を交換し再会を約束した。



2月8日（日）

最終日は、Åsa Pärson先生による解説で、 Sven-Harrys Art museum でLivet och tradornas väv（Woven Lives）を観覧する。スウェーデンアーティストによるテキスタイルの大規模な展覧会である。特に織物の表現に焦点があてられ、織機を単なる道具としてではなく、職人の技と記憶と芸術的表現が交わる象徴的な空間として捉えると説明にあった。スウェーデンのテキスタイルを代表する作家から美術大学を卒業したばかりの若手まで、伝統的なラグから大規模なインスタレーション、コンセプチュアルなテキスタイルが網羅され世代と芸術形式が交錯する展覧会である。日曜日にもかかわらず、Åsa Pärson先生が美術館まで出向いて、すべての作品について丁寧に説明してくださった。午後は、Nationalmuseum（スェーデン国立美術館）やコスチューム美術館など、最終日を自由に過ごした。「世界一長い美術館」との呼び名も高いストックホルムの地下鉄駅も通った。地下の岩盤を掘ったままのむき出しで洞窟のような特徴的な空間に、アーティストによって手掛けられた壁面アートやオブジェが見ることができた。



2月9日-10日

午後の便でストックホルムを出発しヘルシンキを経由し、2月10日午後、無事に帰国した。

今回、展覧会を共に立ち上げ、それぞれの作品を前にじっくり話し合い、オープニングでフィードバックを受けることができたことが、両校の学生たちにとって大変有意義な時間だったと思う。それぞれの文化的背景がどのように制作プロセスに影響しているか、という共通の問いを決めて、プレゼンテーションとディスカッションを行ったことも、それぞれの制作活動を再考する機会にもなったのではないかと思う。また、デザイン・アートのさまざまな立場の方々と出会うことで、刺激を受け知見を広げることができただろう。学生たちの言葉から、テキスタイルについて日々考え制作している新しい仲間ができたという喜びを感じ取ることができた。海外で朝から毎日、少人数で行動を共にしていると、大学の授業を通しての関係性に少し変化があり、早朝のロビー、雪道を歩いている時、地下鉄で隣り合わせの時、何気ないタイミングで、学生がぽつりと話かけてくることがあった。それは、自分の制作やこれからのことであったり、スウェーデンの人々と生活についてだったり、感動したこと発見したおどろきであったり。東京の日常、多摩美の日常を離れ、プロジェクトの特別な時間を、それぞれが自分なりの方法で受け止め内省している様子が見てとれ、うれしく思いながら耳を傾けた。仕事とプライベートのバランスを大切に、ゆったりとしたスウェーデンの人々の暮らしを垣間見ることで、将来の仕事と生活について新たな視点を得るきっかけにもなったのではないだろうか。

プロジェクトの実施までに、何度かKONSTFACKの教員の皆さんとはZOOMミーティングを行い、現場では臨機応変に対応いただいた。３名の先生方が連携し、一週間のプログラムを共に形づくることができ感謝している。一般的に、スウェーデン人は、時間や約束に厳しく、同時に ”Lagom（ラーゴム）”の精神「多すぎず、少なすぎず、程よく」という意識が行動のベースにあると言われている。個を尊重し自己主張をきちんとする、男女平等への意識が極めて高く、社会も家庭もフラットな関係、ワークライフバランスを大切にするとも言われている。今回、KONSTFACKの教員、学生のみなさんの言動、大学のカフェやトイレ、美術館などの公共施設の様子、森山茜氏のお話はじめ、いろいろな場面で、当然のこととして根付いているとあらためて実感し、落ち着いた社会であると感じた。また、Fikaのような楽しく、余裕のあるコミュニケーションを見習いたいと思った。学生には、この体験を一つのきっかけとして、さらに世界へ視野を広げ考察を深め活動してほしいと期待する。期間中、大変厳しい寒さの毎日だったが、交流活動は、とても暖かく親密なものだったと感じ、ストックホルムで出会った皆様に感謝している。

最後に、物価や渡航費高騰の中で、このような海外プロジェクトの実施に、国際交流活動運営費が大きな助けとなった。サポートいただいた大学と国際交流センターの皆様に厚く感謝の意を表する共に、今後もこうした国際交流プログラムがさらに積極的に継続され、学生が在学中に一度は参加することができ、世界に多摩美のネットワークが広がることを願う。

ELLEN MÅRDSJÖ

リ セイシュン

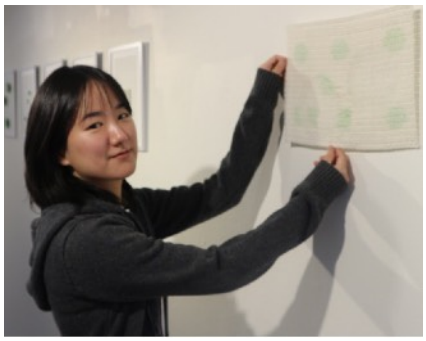
LISA HAGSTRÖM

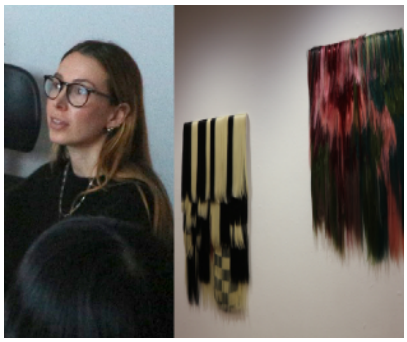
イ ソヨン

JULIA WALLMAN

沼尾優華

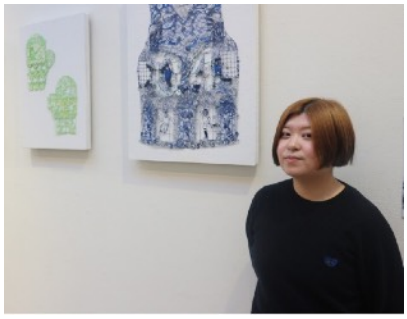
JULIA SCHANTZ


チャン ヒユン


ANNIE LINDBLAD

水野ねね

FANNY JONSSON


久保田凪

ELVIRA STAAF